

第7回ヘルスリサーチワークショップ オープン参加者公募

本年1月に第6回を開催し、関係各方面から高い評価を頂いているヘルスリサーチワークショップ（詳細は当財団機関誌「ヘルスリサーチニュース vol 55（2010年4月号）」をご覧くださいー当財団ホームページからご覧になれます）の第7回を、以下の要領で開催致します。

約40名の参加者は、第6回参加者からの招待枠、新規推薦枠、及びオープン参加枠（公募）で構成されますが、今回、下記のとおりオープン参加者（公募による参加者）を公募致します。

新たな「“出会い”と“学び”」の2日間にご期待下さい。



第7回ヘルスリサーチワークショップ

テーマ：安心して、前向きに生きられる社会の実現
～「つながり」の可能性～

開催日：平成23年1月29日（土）・30日（日）

開催場所：アポロラーニングセンター
〔ファイザー株式会社研修施設〕
〔東京都大田区〕 <予定>
参加者には追って詳細をご案内いたします

参加者：約40名

公募要項

参加費・宿泊費無料

オープン参加枠：6～7名程度

参加要件：下記分野の将来性ある若手研究者または実務担当者（年齢は不問）。
共通言語は日本語（国籍は不問）。尚、動機書の提出と推薦者が必要です。

1. ヘルスリサーチ分野

経済学者、統計学者、経営学者、社会学者、心理学者、人類学者、哲学者、教育学者、法学者、倫理学者、医療疫学者、保健学者、医療マネジメント学者、医療情報学者、医療政策学者、医療システム学者、ゲノム医学者

2. 保健医療福祉分野

医師、歯科医師、看護師、保健師、薬剤師、ケアマネジャー、カウンセラー、理学療法師、介護福祉士、ケースワーカー、栄養士他

3. 行政分野

保健医療政策の立案担当者、保健医療政策の実施担当者

申込期間：平成22年6月1日（火）～7月31日（土）<当財団事務局必着>

選出方法：申込者多数の場合は、幹事・世話人会にて選出。

選出結果は平成22年9月下旬に本人に通知。

申込方法：財団所定の申請書式（当財団ホームページから申込書をダウンロード）に必要事項をパソコン入力の上、当財団事務局へ、郵便でお送り頂くと同時に、E-mailにWordファイルを添付して当財団メールアドレスへお送り下さい。

財団法人ファイザーヘルスリサーチ振興財団

〒151-8589 東京都渋谷区代々木3-22-7新宿文化クイントビル

Tel : 03-5309-6712 Fax : 03-5309-9882

E-mail : hr.zaidan@pfizer.com

URL : <http://www.pfizer-zaidan.jp>

第7回ヘルスリサーチワークショップ

安心して、前向きに生きられる社会の実現

～「つながり」の可能性～

趣意書

コンビニやファミレスへ行けば、24時間好きなものが好きなときに食べられる。お金さえ出せば欲しいモノも手に入る。蛇口をひねれば清潔な水がいつでも出てくる。電気も電話も不自由なく使える。完璧とは言えないまでも、行政の支援も受けられる。

その一方で、格差が問題になっている。そして貧困層のみならず、経済的に恵まれている層のなかにも、日々不安を感じ、前向きになれない人たちが少なからず存在する。自殺者は1998年以降、毎年3万人を超え、少子高齢化時代における医療や介護という問題も私たちの行く末に大きな影を落とす。モノや金だけでは幸せになれないという当たり前のことを、私たちに教えてくれている。

ではどうすれば「これが理想の社会だ」と胸を張って言える状況にはほど遠いこの社会を、一人一人が安心して、前向きに生きられる社会にすることができるのだろうか？それとも、そのような社会は、ないものねだり、青い鳥のような存在なのだろうか？

いや希望はある。その鍵を握るのが「つながり」だ。以下に紹介するように、人と人、人と組織、組織と組織の「つながり」が人や社会を変えることは可能だ。ただ、私たちの価値観やライフスタイルが多様化・流動化し、また都市化・核家族化によってコミュニティーのあり方が変わったことで、これまで機能していた「つながり」が必ずしも機能しなくなり、新しい「つながり」方をデザインする必要性が出てきた。今回のワークショップでは、そんな前提に立って、安心して、前向きに生きられる社会の実現について議論してみたい。

(1) 過疎の村での「つながり」

山間部に位置するA村は、人口1,000人あまり、森林面積率96%、医師1名の診療所が1カ所、入院施設や介護施設はなく、最寄り病院まで1時間、コールから救急車到着まで30分という、「健康でなければ住めない」村である。しかし、この村を訪れるたびに感じるのは、村民同士が支え合う「お互い様のつながり」の存在である。しばらく顔を見ない村民がいると家まで様子を見に行ったり、一人暮らしの隣人に差し入れをしたり、困ったことがあれば“お互い様”の精神で助け合う互助システムが、今でも残っている。

介護予防事業も、行政から住民への「施すサービス」ではなく、村民同士の「つながり」を生かし、あたかも「村の社交場」のような雰囲気を醸し出している。その他にも行政と村民が一体となった取り組みや、社会福祉協議会と密に連携した活動など、「お互い様のつながり」を核に村民が住みやすい環境を提供している。そして高齢者自身も他人や行政に頼りきるのではなく、「大好きなこの村に死ぬまで住むために」健康に気をつけ日々前向きに過ごしている。

幹事

敬称略・五十音順



代表幹事 都竹 茂樹



秋山 美紀



小川 寿美子



後藤 励



その一方で、「つながり」を「わずらわしい」と感じ、そのことに戸惑う若者もいる。しかし、高校進学や就職を機に村を離れてみると、「わずらわしい」と感じていたことは、村人から見守られ、包まれていた証であったと気づき、自分が村の一員であることを強く意識し、何かあっても自分にはこの村があるんだという安心感・心の支えになっているという。

(2) 「つながり」が行動を変える

「つながり」は個人の行動を変えるうえでも欠かせない。食べ過ぎや運動不足を原因とする肥満や糖尿病などの生活習慣病が増加の一途をたどっている。「三つ子の魂百までも」というように、いったん習慣化した行動を変えることは容易ではない。特にそれが食や運動という、ある種「本能」に根ざした行動なら尚更である。かと言って、従来型の無理強いや、生活習慣病の行く末を事細かに説明して危機感をあおるやり方は、その多くがリバウンドするという報告からも分かるように、ほとんど意味がない。

その一方で、保健師や栄養士の適切なサポートがあれば乗り越えられるという人たちがいる。また同じ目標をもつ“同士”が定期的集まって、それを励みに結果を出している人たちもいる。彼らは異口同音に、「見守られていたので、一人じゃないんだと安心して取り組めた」、「仲間の頑張っている姿を見て、自分も前向きに取り組めた」と、他人との「つながり」を成功の理由として挙げる。興味深い取り組みとして、「ゆるいつながり」で最近話題になっているツイッターを通じて、見ず知らずの“同士”が経過を報告、励まし合って成果をあげている例がある。つながり方がアナログかデジタルか、リアルかバーチャルか、つながる強さが強いかわ弱いかよりも、目的を同じくする人と人がつながることの方が重要であり、それが「安心」や「前向き」な気持ちを生み、ついには行動まで変えられる。

このように、住民同士の「つながり」、地域・組織との「つながり」、目的を同じくする者との「つながり」、つながりの種類は違えど、自分の拠り所が感じられる「つながり」が鍵になる例がある。

本ワークショップでは、安心して、前向きに生きていける社会を実現するために、どのように「つながり」方をデザインすればいいのか、いや「つながり」方を考えることなどそもそも意味がないことなのか。医療、介護、福祉、メディア、社会学、経済学など様々な分野で活動されている皆さんの経験を交えながら、大いに議論していきたい。

第7回ヘルスリサーチワークショップ幹事・世話人一同

世話人



石田 直子



金村 政輝



當山 紀子



豊沢 泰人

幹事・世話人からのメッセージ

代表幹事 都竹 茂樹

高知大学医学部医療学講座 准教授

頭では分かっている、独りでは頑張れないし、続かない。これまで数多くの“メタボ”と言われる方たちをサポートしてきた実感です。その一方で、他人とつながることで、こちらが驚くほど変わる方もみえます。「つながり」には、とんでもない可能性とパワーが秘められている!!それが私のもう一つの実感です。今回のワークショップでは、安心して、前向きに生きていける社会を実現するために、これまでとは違った新しい「つながり」方を考えることをテーマにしました。医療、介護、福祉、メディアなど様々なフィールドで活動されている皆さんと一緒に議論できることを楽しみにしています。

幹事 秋山 美紀

慶應義塾大学総合政策学部 准教授

人やモノが「つながる」ことで解決できる問題、実現できることは多い。だけど、つながりたくてもつながらない人や、つなげたくてもつながらないモノもある。たとえば人が集まったからといって必ずしも皆がつながるとは限らない。じゃあ「つながる」ために必要な要素って何だろうか?モノとモノをつなげる場合には標準化のようなルールがある。たとえば水道の蛇口とホースだってサイズが違ったらつながらない。人と人がつながるためには、「ことば」や「思い」の共有も必要かもしれない。ピタッとつながる場合、ゆるやかにつながる場合、人のつながり方にはいろいろある。今年も皆さんと議論することでつながっていくことを楽しみにしています。

幹事 小川 寿美子

名城大学人間健康学部 教授

一見健康そうな人でも、会話をし始めると、なんと不健康な生活を送っているのか、と驚愕することが多くなった。健康は「身体的・精神的・社会的に完全に良好な状態」とWHO憲章で定義されているが、この3条件のなかで健康の根幹をなすのは“社会”であると私は思う。なぜならば一つの個体が数多くの役割を持つなど複雑な社会構造を形成している“人”は元来、「社会(ポリス)的な動物」としての性を持つからである。人と人との「つながり」が希薄な社会には身体・精神ともに良好な状態は築けない。ノン・バーチャルな「つながり」による、生きがいを持つ社会構築の可能性を創造するため、熱意溢れる参加者との出会いを今年も楽しみにしている。

幹事 後藤 励

甲南大学経済学部 准教授

仕事から、毎年たくさんの新入生を迎えます。20人ほどのクラスでグループワークを始めると、自分の立ち位置を気遣いながら空気を読んで、意外とスムーズに役割分担を決め、「つながり」ははじめます。授業が終わった後のグループでの相談はケータイメールを使ってどんどん予定変更しながら、全員集まることは少ないようですが小規模の集まりを繰り返してプレゼンやレポートを作り上げます。学生を見てみると、つながることの便益と、つながることの費用(めんどくささも含め)を今ある技術の中で最大限考えているなあと感じます。健康の分野ではどんなつながりが社会に必要なのでしょうか?みなさんと議論できることを楽しみにしています。

世話人 石田 直子

インディペンデント・エディター

“ウィークタイズ”という言葉があります。家族や職場など、共同体のなかでの“ストロングタイズ(強いつながり)”とは違う、立場の異なる他者との弱くゆるやかなつながりのことです。困難に陥ったとき、意外にも問題解決の大きな要素の一つがこのウィークタイズであることが、私も参加した社会科学の研究で浮きぼりになりました。伝統的な血縁や企業など、共同体の崩壊が進む今、新しいつながりのかたちを模索する時期なのでしょう。「人と人とのつながりのなかからしか、希望は生まれない」。アマゾンの奥地からやってきたシャーマンがそう語っていました。私たちもこのワークショップでつながり、希望の芽を吹けますように。

世話人 金村 政輝

東北大学病院 総合診療部 講師

現在、大学病院で紹介状なしで受診された方の初診を受け持っていますが、テレビやインターネットなどの情報に過度に不安を募らせ、受診される方が少なくありません。また、患者さんによっては、家庭環境やライフスタイルの問題も大きく、医学的な対処だけでは解決が困難と思われることが少なくありません。分子生物学などの発展を背景に医学は著しく進歩してきましたが、現在の健康問題への対処には、医学的なアプローチのみならず、社会的なアプローチが必要だと感じています。医療、介護、福祉、教育、行政、住民運動、マスコミなど様々なフィールドからの参加者の皆さんと一っしょに「つながり」の可能性について模索したいと考えています。

世話人 當山 紀子

東京大学大学院医学系研究科 博士課程

ワークショップでは、他分野の参加者が対等にディスカッションすることで、新しい考え方に気づいたり、他分野の人たちと協力できる可能性に気づくことがあります。そういう意味では、このワークショップ自体が“つながり”の始まりにもなるのではないのでしょうか。一人の力や努力には限界があり、人の意見を聞くこと、自分が人にできることは何かを考え、そして人に助けをもらえることは何かを知ることは、問題の解決の一步になるかもしれません。今回のワークショップでは、「安心して、前向きに生きられる社会の実現」に向けて、“つながり”の様々な可能性を糸口にして皆さんと語り合えるのを楽しみにしています。

世話人 豊沢 泰人

ファイザー株式会社コーポレートアフェアーズ統括部長

今回もかなり大きなテーマで、2日間のワークショップが楽しみです。社会とのつながり自体、以前とはスコープも変わっているように思います。それぞれのムラ社会で生活していながら、IT文化の浸透により世界中とつながっているようでもあり、隣人とさえつながっていない事もあります。日本のガラパゴス化が叫ばれる一方で、日本の文化は以前より確実にグローバル化しており、海外で漫画を読んだり、寿司で日本酒を飲むことも珍しくありません。日本の政治に失望して海外に望めば、同じ事を欧米でも市民が叫んでいます。私たちの高齢化問題は、明日の世界の問題でもあるのだと感じる事が多くなりました。自分の問題を皆さんとのつながりを通して、俯瞰できればと期待しています。